

『源氏物語』 紫の上を取り巻く継子・継母関係

安藤純

一 はじめに

日本の古代文学において、継子・継母関係を描いた物語は少ない。そして、その多くは「継子いじめ譚」であった。『源氏物語』の成立以前には既に、『落窪物語』『古本住吉物語』のような、継子いじめを主題とした物語が存在した。「継子いじめ譚」は物語の素材としてある程度の地位を確立していたのだろうか。

では『源氏物語』はそれをどのように認識していたのだろうか。物語中に以下のような場面がある。

継母の腹きたなき昔物語も多かるを、心見えに心づきなしと思せば、いみじく選りつつなむ、書きととのへさせ、絵などにも描かせたまひける。(蜩③二二六頁)

右は蜩巻にある、明石の姫君に物語を読ませるにあたって、光源氏と紫の上が物語について論じ合った後の記述である。「継母の腹きたなき昔物語」によって、継母とは意地の悪いものだ^①と明石の姫君に思わせてしまつては、紫の上にとって都合が悪いということだ。この箇所について、清水泰氏はこのように指摘している。

源氏物語の作者は、継子いじめのようなみにくいことがらには興味はなかつた。むしろこういうことをば嫌っていた。それは蜩の巻に見えていることばが、作者の意見を現わしているとおもわれる。(以下、前掲の本文の引用—安藤注)これは明石の姫君に対する、源氏の心づかいではあるが、この心づかいが、すなわち作者の心づかいであろう。

この箇所は語り手が源氏の心情と行動を語つたものだ。この直前に、源氏の発言として様々な物語論が書かれるが、継子いじめの物語について書かれることはない。これに関して想定される理由の一つは、作者自身の物語に対する意見を投影したということだろう。つまり「継子いじめ譚」とは、「継母は継子をいじめるもの」という認識を徒らに植えつけるものであり、実際はその型に収まらない継子・継母関係が存在すると考えていた。いわば、「継子いじめ譚」への批判である。

作者が批判意識を抱いていたとすると、『源氏物語』での継子・継母関係は、従来のものとは異なる様を描いていたはずだ。兵部卿宮の北の方と若紫、空蟬と紀伊守・軒端萩、紫の上と明石の姫君な

ど、多くの継子・継母関係が見いだせるが、それらの関係をどのように描き、従来の「継子いじめ譚」との違いをどのように表現したのだろうか。本論では、兵部卿宮の北の方と若紫の関係を注目して考察してゆく。

二 論証の前提の提示

二― 従来の「継子いじめ譚」について

まず具体的な考察に入る前に、本論における「継子いじめ譚」に関する認識を提示しておきたい。これに関して、清水泰氏の論にこのようにある。

平安時代にみる継子物語は、室町期にみる継子物語のように型にはまったものではない。継母子関係、継父子関係などの種々相があらわれてくる。後に継子物語としての型に定着するまでにいたる継子物語発生の諸相を示しているものと思う。

(中略)

おもうに平安時代初期にあたって、明らかな継子物語の文献の徴すべきは見出せないけれども、継子継母の関係は早くから存在したのであろう。古事記、日本書紀に庶兄庶妹の文字のあらわれていることは一考すべきことである。源氏物語に、「継母の腹きたなき昔物語も多かるを」(「登」継母の北の方は安らかにおぼすべし、昔物語に殊更に作り出でたるやうなる有様なり) (賢木)「昔物語を見るにも、よのつねの志深き親だに、時にうつろひ人にしたがへば、疎にのみこそなりけれ」(真木柱)な

ど記されていることから考えると、継母の腹きたない物語が、相当世の中にあつたことを裏書している。そして平安時代の継子物語で、室町時代などの継子型物語のようなのは、落窪物語がただ一つつたえられているのみである。この落窪物語の成立年時には、諸説あるにしても、枕草子以前であることには間違いない。だから枕草子以前に継子物語として型に入ったものが制作されているのが、その後平安時代の物語として落窪物語の構成を襲うたものは出ていない。そして落窪を除いたこの時代の継子物語というものは、源氏物語を除いては継母は意地悪の腹きたないものとしてあることは、後の継子物語にみるのと同様である。

よって、清水氏の考える平安期までの「継子いじめ譚」について以下のことがいえる。

- ・継子・継母関係は数多く描かれ、特に「継母の腹きたない物語」が多かった。
- ・「源氏物語」を除き、継母は「意地悪の腹きたないもの」である。

- ・継子物語の型が成立したのは室町期。平安期でその型に近いものは「落窪物語」のみ。

また、「継子いじめ譚」の話型の成立に関しては、三谷邦明氏による以下の論がある。

…継子いじめ譚は、源氏物語蜜巻に「継母の、腹きたなきむかし物語もおほかるを」とあるごとく平安朝初期物語の典型的

な話型の一つであり、古本住吉物語等の先行作品を持つ落窪物語にとつては、継子虐め譚という話型は、ありふれた出来事・筋書であつたはずである。それ故、落窪物語は、奇想天外な筋書を求めて、それまでの継子虐め物語にはなかつたと想像される猥雑で残酷な場面を強調すると共に、一方では、落窪姫君の悲劇は、一夫一妻制ではない婚姻制度によるものであることを主張したり、継母の性格が悪かつたからだととして、北の方の性格描写を表現するのである。

このように、この箇所が指すものを「継子虐め譚という話型」と解釈し、「ありふれた出来事・筋書」であつたとしている。三谷氏は「継子いじめ譚」に関して、他の論文において、関圭吾氏の成年・成女式の通過儀礼を話型としたものであるという解釈を踏まえ、⁴ たうえで、貴種流離譚の上に成り立つた話型であるとしている。⁵ これは現在も有力な論であるが、現存する作品が少ない以上、話型として安定したものであるとはいひ難いだろう。また、貴種流離譚と関連付けて話型を解釈したとすると、現実味のある「ありふれた出来事」と考えることは困難なはずだ。

さらに、自身も「なかつたと想像される」としているように、そのような物語が全て散佚しているため確証はない。そのため、平安時代までの「継子いじめ譚」はあくまでも要素や素材の次元であり、安定した話型は室町期に成立したと考える他ないだろう。

さて、その室町期に成立した継子物語の型であるが、これに関する研究は、市古貞次氏が物語ごとの「人物並に筋書の対照表」とい

う形でまとめ、⁶ それを受けた関敬吾氏が、昔話との関連において要素を分解し、次のようにまとめなおした。⁷

- A、求婚——継母の妨害
- B、虐待——逃亡・幽閉・追放
- C、庇護者——亀・尼・海士
- D、求婚者の探索——祈願・神霊の案内
- E、(1)再会

(2)結婚

(3)子女の誕生

(4)父子再会

F、反对者・加担者の懲罰

G、(1)援助者の褒賞

(2)懲罰者の放免

関氏は、このような類型を持つ『住吉物語』『落窪物語』など九つの物語を「住吉型」に分類した。前掲の清水氏の論に、「平安時代の継子物語で、室町時代などの継子型物語のようなのは、落窪物語がただ一つつたえられているのみである。」とあつた。実際に『落窪物語』をこの類型に当てはめると、Aの求婚の段階で形式上結婚が成立している点や、C、Dの段階において神仏等の手助けが無い点を除いて一致すると言える。よつて、この類型が室町期に成立した「継子いじめ譚」の類型の一つであり、清水氏が考える型とおおよそ一致すると考えられる。

古代において、現存する継子いじめを主題とした物語は『落窪物

語」のみであり、その他は散佚しているが、『源氏物語』等の作品から、その他にも「継子いじめ」の物語が確かに存在していたことが分かる。なかでも『古本住吉物語』は、『枕草子』に「物語は住吉。宇津保。殿うつり。」(一九九段・三三三六頁)と、その名が挙げられているように、代表的な継子いじめを主題とした物語であった。よって本論の四章では、『落窪物語』と『古本住吉物語』の比較によって仮説を検討する。

また清水氏の、『源氏物語』を除いて継母は「心地悪の腹きたないもの」として描かれるという見解を踏まえ、『源氏物語』以前の、「継子に悪意をもつ継母」が登場する物語やその箇所(室町期に成立した類型ではない、ごく単純な要素)を、以後(継子いじめ譚)と表記することとする。

二―二 「源氏物語」の「昔物語」批判

〈継子いじめ譚〉を語り手は「継母の腹きたなき昔物語」と評しており、それを〈継子いじめ譚〉への批判と捉えたが、「昔物語」という言葉に注目して、それを考察しなおしてゆきたい。以下、その用例である。

・ 継母の腹きたなき昔物語も多かるを、心見えに心づきなしと思せば、いみじく選りつつなむ、書きととのへさせ、絵などにも描かせたまひける。(蜚^③二二六頁)

・ (真木柱の乳母たち)「昔物語を見るにも、よのつねの志深き親だに、時にうつろひ人にしたがへば、疎にのみこそなりけれ。

…」

(真木柱^③三七二頁)

このように、語り手は(継子いじめ譚)を「昔物語」であると表現している。さて、この「昔物語」という語は『日本国語大辞典』によると、①「昔作られた物語、昔から伝わる物語・伝説」と、②「懐旧談」という、二種類の意味があり、『源氏物語』においてもこの二つの意味で用いられていた。用例を検索したところ、三三三件見いだせ、①の意が一七件、②の意が一六件であった。ここで考察したいものは①の用例であるため、それに限定する。

「昔物語」について、「物語」との差異という形で論じた毛利正守氏の論^④がある。

そこで、いま創作者(紫式部)の立場に立つて、この両語間の関係を考へてみるならば、次のことが云へるであろう。すなはち、紫式部が、源氏物語の場面に、源氏物語以前の物語を取り入れる際、物語に一つの文学作品としての意義とか効用とかを要求する箇所であれば、その場合は「物語」の語をもつて記し、一方、荒唐的なことを要求する箇所であれば、だいたい「昔物語」の語をもつて記す。(中略)すなはち、その相違は竹取以後の物語は「物語」なる語で記され、それ以前は「昔物語」なる語で記されるといふが如き時代の前後ではなくして、同一の物語であつても、また、同時代の物語であつても、紫式部がそれを取り入れる場合、源氏物語の場面で要求する内容如何によつて「物語」とも、「昔物語」とも記したと見るべきであろう。

つまり毛利氏は、「昔物語」という語に荒唐の意味を託していると考えている。しかし、それは明確な使い分けではなく、「物語」には非現実的な意味の用例がほとんどない一方、「昔物語」には一定数あるということである。またこの後の論では、現実的・非現実的という捉え方でも考察し、作者の物語観にまで言及している。

これを前提とするが、「昔物語」からは荒唐さや非現実性の他に、嫌悪感にも似た批判意識が読み取れる。

・昔物語などにこそかかることは聞け、いとめづらかにむくつけけれど、まづ、この人いかになりぬるぞと思ほす心騒ぎに、：

(夕顔①一六七頁)

・昔物語にも、物得させたるをかしこきことには数へつづけたれど、いとうるさくて、こちたき御仲らひのことどもはえぞ数へあへばらぬや。

(若菜上④九八頁)

・こはいかにもてなしたまふぞと、夢のやうにあさましきに、後の世の例に言ひ出づる人もあらば、昔物語などに、ことさらにをこめて作り出でたる物の譬にこそはなりぬべかめれ。

(総角⑤二六六頁)

これらを見ると、現実的・非現実的とは全く別の問題として批判意識が読み取れることがわかる。これは、非現実性と同様に、「物語」の用例にはほとんど見られないものであった。この二つの問題を、すべての用例に関して検討し下の表にまとめた。

毛利氏の論からも分かるように、「物語」と「昔物語」の使い分けに対する明確な分析は困難だ。その理由は、批判意識という感覚

巻	頁数	非現実性	批判意識
帚木	① p.82		
夕顔	① p.167	○	○
末摘花	① p.269		
	① p.293		○
蓬生	② p.352		○
少女	③ p.44	○	○
胡蝶	③ p.183		
蛩	③ p.216	○	○
真木柱	③ p.372		
若菜上	④ p.98		○
橋姫	⑤ p.140	○	○
	⑤ p.244		
総角	⑤ p.266	○	○
	⑤ p.412		
宿木	⑤ p.412		
蜻蛉	⑥ p.209	○	
手習	⑥ p.311		
夢浮橋	⑥ p.376	○	

的・感情的な要因によって「昔物語」が用いられているからだと考えられる。つまり、物語の中で明確にあらわれていなくても、「昔物語」といわれるものには批判意識を抱いていた可能性がある。よって、「継母の腹きたなき昔物語」という表現は、(継子いじめ譚)への批判意識のあらわれと考えて差し支えないだろう。

しかし、(継子いじめ譚)が「物語」と書かれる例もある。・…継母の北の方は安からず思すべし。物語に、ことさらに作り出でたるやうなる御ありさまなり。

(賢木②一〇三頁)

『源氏物語大成』によると、青表紙本では肖柏本、河内本諸本、他いくつかの別本では、右の傍線部が「昔物語」と記載されていたが、現代の注釈書はすべて「物語」を本文として採用している。しかし、他の(継子いじめ譚)を表す場合は、この箇所以外は異同なく「昔物語」としているため、その方が適切かもしれない。

「物語」が適切な本文と仮定すると、作者が本来は批判意識を抱いている〈継子いじめ譚〉を、物語に円滑に取り入れるためではないだろうか。それは、毛利氏が「紫式部が、源氏物語の場面に、源氏物語以前の物語を取り入れる際、物語に一つの文学作品としての意義とか効用とかを要求する箇所であれば、その場合は「物語」の語をもつて記し」ていたと考えていたことと同じ趣旨である。言い換えれば、〈継子いじめ譚〉を取り入れる際にそれに対して批判意識をあらわすと不都合が生じるからだ。この箇所の兵部卿宮の北の方はまさしく〈継子いじめ譚〉にある継母像なのだろう。しかし、この箇所を根拠として〈継子いじめ譚〉への批判意識がないとは考えられない。この北の形象が、従来の〈継子いじめ譚〉と同様に形成されたものでないことは後述する。

〈継子いじめ譚〉が「昔物語」といわれることを、批判意識のあらわれと考えてきたが、そもそも物語中の継子・継母関係にすぎずま継子いじめを見出そうとする姿勢は、現代の研究により生まれたものであると考えられる。たしかに、『源氏物語』以前から〈継子いじめ譚〉は存在するが、現存するそれを主題とした物語は『落窪物語』のみである。中世以降に物語の類型が成立し、研究によってそれが明らかになったことで、それ以前の物語も同様に解釈する姿勢が生まれたのだ。

この論を前提として、次章から兵部卿宮の北の方と若紫の関係を具体的に考察する。

三 ラウンド・キャラクターとしての北の方

三―一 北の方の感情の齟齬

『源氏物語』における代表的な継子・継母関係として、兵部卿宮の北の方（以下、北の方）と若紫が挙げられる。この両者の関係は良好なものではなく、〈継子いじめ譚〉にあるような関係と同一視される傾向がある。しかし、そのように単純に捉えてはならない。前述のように、作者が〈継子いじめ譚〉に疑問や批判意識を抱いていたとすれば、何らかの工夫を凝らしているはずだ。

そう考えるきっかけとなる疑問を抱いたのは以下の箇所だ。

北の方も、母君を憎しと思ひ聞こえたまひける心もうせて、わが心にまかせつべう思しけるに違ひぬるは口惜しうおほしけり。

(若紫①二六〇頁)

これに対して、最初に注を付けたのは『湖月抄』⁽¹⁰⁾だと思われる。「わが心にまかせつべう」について、「紫上を、継母のやしなひにて、かしづくべく思し召しけるも、たがひたる也。」とあった。この「かしづく」という表現は、愛育の意に他ならない。『湖月抄』においては、ここに〈継子いじめ譚〉における継母像はうかがえないと考えるか、そのような継母像は考慮の外にあることがわかる。そして、後続の諸注釈書は以下の通りである。

・兵部卿宮の北方も紫上の母君をにくしと思ひ給ひける心も今はうせて紫上をばわが心にまかせておふしたてんとおほしけるに事たがひければくちをしくおほすと也

(『源氏物語評釈』⁽¹¹⁾)

・自分の思ひ通りに紫上を育てる事が出来るだらうと思つたのに、そのあてが外れたのは残念だと思ひになつた。

〔對校 源氏物語新釋〕⁽¹²⁾

・紫上の亡き母君を憎らしいと思はれた心も今は消え失せて。自分の思ひ通りに紫上を育てる事が出来ようと思はれたのに、そのあてが外れたのは。

〔日本古典全書〕⁽¹³⁾

これらは解釈が確定するような表現をしていないため、(継子いじめ譚)の要素は考慮の外か、判断を避けていると考えられる。強いて言うならば、「おふしたてん」や「育てる」という表現は、率直に、愛情によるものと解釈していると捉えることもできる。これらに続く『日本古典文学大系』⁽¹⁴⁾は以下の通りである。

・北の方は、自分の思う通りに、紫上をうまく育てる事が、きつとできるとお思いであつたのに、それが食い違つてしまつた事をば。

この注は、北の方が若紫の養育に積極的であると解釈しており、『湖月抄』が「かしづく」と表現したものに近いと言える。

ここまで提示した注釈書では、この箇所を愛育の意として解釈するか、明確な判断が提示されないかのいずれかである。それに対して、現代の注釈書は以下のように注を付ける。

・北の方にしても、(紫の上の亡くなつた)母親を憎いと思ひ申してこられている気持ちも消えて、自分の思ひ通りにきつと出来そうだと思つてこられていることに対して、(結果が)はずれてしまうことは残念に思われたことだ。故母君を憎いと思つ

ていたことがここでははっきりと書かれる。継母である北の方としては、孤児の紫の上を引き取つて思うままにしたいと思つていたことが分かる。養母として存分にあるまじうつもりだということであろう。話型的には継子いじめを感じさせる。

〔新大系〕

・ここでは、実の娘のように愛育するというよりも、紫の上の美質ゆえに、親権を行使し将来の縁組などを期待し楽しむといった気持。

〔新全集〕

これらは『湖月抄』や『大系』とは対照的に、(継子いじめ譚)らしい継母像を見出ししている。継母として若紫を意のままに扱おうとする、悪意のある感情である。ここに、注釈史の転換点が見いだせるだろう。

この後の物語において、北の方は紫の上に悪意を抱く存在として描かれており、それらとの整合性を考えると、『新大系』や『新全集』の注釈は適切なように思える。しかし、これらの注釈において説明のつかない部分がある。それは、なぜ母君への憎しみが失せたにもかかわらず悪意のある扱いをしようと考えたのかという点だ。悪意を抱くのであれば、失せることのない母君への憎しみをそのまま若紫に向けたほうが自然である。

では仮に、『湖月抄』や『大系』が付けた注のように、若紫を愛育しようと考えていたとするとどうであろうか。たしかに、愛育しようと考えていたとすると、その後の北の方像と齟齬するだろう。しかし、どこかで北の方の心情に大きな変化があつたのかもしれない

い。フラット・キャラクターとしていつも紫の上を憎むという、それ以上の役割が与えられていたと考えるのである。この仮説に基づいて、北の方の心情・人物像を考察してゆく。

三―二 「源氏物語」における「心にまかせ」た行動

この論に関して想定できる反論は、「わが心にまかせつべう思しけるに違ひぬるは口惜しうおほしけり」についてだろう。これについては畑恵里子氏が言及している¹⁵⁾。

この時、語り手は兵部卿の宮の北の方にも触れ、「母君を憎しと思ひたまひける心もうせ」、落胆していた様子を語る。そのため、尼君たちが抱いていたおそれは杞憂にも見える。だが、仮に継子いじめがなくとも、紫の上の人生を意のままにする思考であったことが、「わが心にまかせつべう」との叙述から読みとれよう。継母による支配が紫の上を待ち受けていたことが、ここに露呈される。また、実母の死から一〇年近くも経て（「若紫」）、紫の上を引き取る段に、「母君を憎しと思ひきこえたまひける心もうせて」と語られている意味は重い。この叙述からは、紫の上を「わが心にまかせ」ることが可能となったために、残存していた実母への「憎し」が「うせ」たとさえ解しうる。親権を行使し、縁組を期待するというより、紫の上が実母の身がわりに負わされていた「憎し」が、さりげなく表出されていると読むことができよう。

これによると、母君に対して抱いていた憎しみを、支配下に置く

ことが決まった紫の上に向ける、つまり、憎しみの対象が母から娘へ移行し、母君への憎しみが失せたことだろう。その根拠として挙げられるのは「わが心にまかせつべう」である。

「こころに任す」の意味は『日本国語大辞典』によると、①「自分の思うままに行う・ふるまう」②「思い通りになる・事が運ぶ」③「相手の考えに任せる・従う」である。『源氏物語』中の「心にまかせ」の用例を検索したところ、四七件見いだせ、そのほとんどが①、②の意味であった。主体の考え・感情と現実が一致する様子や、利己的な様である。

また、当該箇所のように、主体の「心にまかせ」た行動の対象が他者である場合の用例は一件であった（当該箇所を含む）。

・（源氏は）心にまかせて見たてまつりつべく、人も慕ひざまに思したりつる年月は、のどかなりつる御心おごりに、さしも思されざりき。
（賢木②八八頁）

・（夕霧は）かかる人々（紫の上・玉壘・明石の姫君ら）を、心にまかせて明け暮れ見たてまつらばや、さもありぬべきほどながら、隔て隔てのけざやかなるこそつらけれ、など思ふに、まめ心もなまあくがる心地す。
（野分③二八五頁）

・（薫は）…昨日かやうにて、我まじりぬ、心にまかせて（女二の宮を）見たてまつらましかばとおほゆるに、心にもあらざうち嘆かれぬ。
（蜻蛉⑥二五三頁）

これらを見ると、自らの感情や願望のままに行動する様が伺えるが、行動の対象への悪意は見受けられない。確かに利己的な様を表

現するが、それが悪意や、他者の迷惑を考慮しない心情とは結びつかない。むしろ、身内の女性や心を惹かれる女君に対する行動に「心をまかせ」を用いる例も多く、「恋情や愛情に基づく心のままに」と解釈することもできるだろう。

よって、悪意が存在しないと立証する根拠としては不十分であるが、北の方の「わが心にまかせつべう」の部分だけで、悪意が存在すると考えることは不可能である。

三―三 兵部卿の宮家での若紫引き取りの問題

さらに北の方の心情を考えるにあたって、若紫を訪ねた際の兵部卿宮の発言、心情を考察してゆく。まず、この発言からである。

「年ころも、あつしくさだすぎたまへる人に添ひたまへる、かしこに渡りて見ならしたまへなごものせしを、あやしう疎みたまひて、人も心おくらしを、かかるをりにしものしたまはむも心苦しう」
(若紫①二四八頁)

この場面での兵部卿宮は、現在の若紫の住まいを悪く言ったり、若紫の機嫌を取ろうとしている様子から、強引に若紫を引き取ろうとする心情が伺える。北の方をはじめとする家の者に了承が得られないという推測もできる。

それに加え、右の「人も心おくらし」という表現である。この箇所について、現代の注釈書は以下のように訳を付ける。

- ・あちらも隔てをおくようだった (『玉上評釈』)
- ・あちらのほうでも気がねしているようでした (『全集』)

・北の方も面白からぬようだった (『集成』)

・あつちの人(兵部卿宮の北の方)としても気兼ねがあつたようだ (『新大系』)

・あちらのほうでも気がねしているようだった (『新全集』)

・あちらの人も気がねするようだった (『鑑賞と基礎知識』)

・北の方も心の隔てを起こされたようだ (『源氏物語注釈』)

この「心おく」についてだが、『日本国語大辞典』には記載がなく、用例を検索すると、『源氏物語』以前には用例がなく、それ以降の作品の用例も僅かである。よって『源氏物語』特有の表現である可能性があるため、用例を見て語意を検討する。

「心おく」は源氏物語中に四四件見いだせた。そこから語意を分類すると以下になった(当該箇所を除く)。

A、

① 気がねする。気まずく思う。気が許せない。(二一件)

② 気を悪くする。気分を害す。(七件)

③ 人を悪く思う。疎む。(七件)

④ 用心する。警戒する。(六件)

⑤ 恨む。憎む。根に持つ。(四件)

⑥ 遠慮する。(三件)

B、気にとめる。執着する。(五件)

まずA・Bと大別したが、Aは人や物に対して心に隔てを置くという意の派生であり、対してBは心の中に置いておく、意識に留めるといふ意であると考へた。なお⑤の例に関しては、「恨みの感情

を心に置いておく」という形でも解釈でき、Bに分類する方が適當とも考えられる。

これを踏まえて現代の注釈書の解釈を検討すると、①の意で捉える注釈書が四つ、大きくAと捉えるものが二つ、③の意で捉えるものは『集成』のみとなる。③の意で捉えることについてだが、若紫引き取りを望む兵部卿宮が、当人と乳母の少納言を目の前に継母の悪意をうかがわせる発言をするとは考えにくい。すると、詳細な判断を避けているものもあるが、多くの注釈書が採用していることに加え、用例数の多い①の「気がねする」という意で解釈することが適切だろう。以下、「気がねする」と解釈した用例である。

・かの御息所はいとほしけれど、まことのよるべと頼みきこえむには必ず心おかれぬべし、年ごろのやうにて見過ぐしたまはば、
 (葵②七六頁)

・(内大臣)「ここにさぶらふもはしたなく、人々いかに見はべらんと心おかれにたり。」
 (少女③四一頁)

・(薫)「…おぼつかなしと思ふをりも、いま近くて、人の心おくまじく、目やすきさまにもてなして、行く末長くをと思ひのどめつつ過ぐしつるを、…」
 (蜻蛉⑥二三三頁)

この兵部卿宮の発言が事実だとすれば、尼君が死ぬ前の数年間、北の方は若紫の引取りに対して気がねしていたのであり、(継子いじめ譚)における継母としては不自然な心情となる。継母として若紫とうまく付き合っていないと考えていたか、若紫が肩身の狭い思いをすることを心配していたと推測できる。この心配は、紫の上

に悪意を抱く北の方像とはかけ離れている。

三—四 北の方の感情の推移に関する仮説

ここで、北の方の若紫(紫の上)とその母君に対する感情の推移を、次の表にまとめた。

母君の死の前	母君を憎む。 (母君は北の方に関する気苦勞により亡くなる) (若紫①二二三頁)
母君の死の後 尼君の死の前	引取りに気がねをする。 (若紫①二四八頁)
源氏の引取り後	母君への憎しみは失せている。若紫を自分の思うままに扱えると思っていたのに残念。 (若紫①二六〇頁)
源氏に引き取られていたことを知る	実子が不遇の中、源氏に引き取られた紫の上を妬ましく思う。 (賢木②一〇三三頁)
その後(賢木巻以降)	紫の上、又は源氏を憎む。

表中の傍線部は、紫の上を憎む北の方像と齟齬する点であり、優しさや、それに繋がりのうる心情が伺える。ここで問題となるのは、引取りへの気がねと、後の、引取れず残念という心情が結びつかないことだ。気がねをしていたのならば、むしろ何者かに引取られて多少なりとも安堵する方が自然であり、前掲の『新大系』や『新全集』のように、悪意のある扱いができなくなったことを残念に思ったのであれば、最初から継子として思うままにと考えるはずだ。では、これらの要素を整合性が取れるように話の筋を組み立てるとす

ると、どうすればよいだろうか。

そこで、表の――に当たる部分に、北の方の若紫愛育の決意があったという仮説を立てた。具体的に想像するならば、松風巻の、源氏が紫の上に明石の姫君養育を依頼し、紫の上が承諾する場面のような状況である。明石の姫君は、母を亡くしてはいないものの、紫の上と継子・継母関係であるため、源氏はそれ考慮し、紫の上の顔色を伺いながら打診している。もちろん北の方と若紫、紫の上と明石の姫君の関係・境遇には相違点も多いが、兵部卿宮と北の方の間で、このようなやりとりが行われたとは推測できないだろうか。先に挙げた表の――の部分に入る若紫愛育の決意とはそのことである。

数年前から、兵部卿宮は北の方に若紫の引取りを打診していたが、北の方は気がねして聞き入れなかった。しかし尼君の死により、若紫に身寄りがなくなったこの時点で、北の方は引取りを受け入れる。もちろんそれは愛育するということであり、悪意があつては、年来の気がねの末の決断とは考えにくいからだ。しかしその決意は裏切られ、それが、のちに紫の上や源氏への悪意の根源となる。以上が仮説である。

四 「賢木」巻以降の北の方

四―一 従来の〈継子いじめ譚〉における継母の心情

前述の通り、北の方は若紫が源氏に引取られた後、判を押したように紫の上又は源氏を憎む、〈継子いじめ譚〉に描かれているもの

に近い継母となる。その北の方像を考察するにあたり、従来の〈継子いじめ譚〉を中心とする物語の継母の心情を確認しておく。

しかし前述の通り、現存する物語は『落窪物語』のみである。『落窪物語』は、『源氏物語』中に言及はないものの、成立年代に加え、長谷川福平氏を先駆として指摘され続けている落窪の姫君と紫の上の類似点などから、作者はそれを読んでいたと考えられる。

また、『古本住吉物語』は散逸しており、現存する『住吉物語』とは異なるものであるが、全く異なるものではない。後の研究においてしばしば参照される石川徹氏の論によると、「現行本を目して、全くの偽作・擬作とするのも、古本と隔たる所の少ない改作とするのも誤りである。改作といえは改作だが、この物語の長い伝来の歳月に伴うやむを得ぬ変貌であったと見るべきであろう。」ということである。さらに、論証のまとめとして、「古本住吉の記事が現行本と全く一致するのは、原説話発生以来の骨子の所だけであり、かなり似ているのは、前半の姫の発見に到るまでであつて、後半は、骨子以外はほとんど相違していたとみとめられる。」と記しており、その相違は総じて簡素化によるということだ。この論はおおよそ後の研究に引き継がれているため、本論でも現存の『住吉物語』の内容を提示するが、話の骨組みについて考えることに加え、論証の材料として不完全なものだということをお断しておく。

では、具体的に『落窪物語』における継母の心情を確認してゆく。
 ・(縫物が)いささかおそき時は、「かばかりのことをだに、ものうげにしたまふは、何を役にせむとならむ」と責めたまへば、

嘆きて、いかでなほ消えうせぬるわざもがなと嘆く。

(一巻・一九頁)

・(中納言は落窪の間から) 帰りたまひて、北の方に、「落窪をさしのぞきたりつれば、いと頼み少なげなる。白き裕一つをこそ着てゐたりつれ。子どもの古着やある。着せたまへ。夜いかに寒からむ」とのたまへば、北の方、「常に着せてまつれど、はふらかしたまふにや、飽くばかりもえ着つぎたまはぬ」と申したまへば、「あな、うたてのことや。親にとくおくれて、心もはかばかしからずぞあらむかし」といらへたまふ。

(一巻・二六頁)

右は物語中で、中納言の北の方が具体的に落窪の姫君を叱責する最初の箇所だ。このように継母が姫君の人間性に対して叱責する様は、姫君が二条院に救出されるまでに幾度となく描かれる。左は父の中納言と継母の会話であるが、『新全集』は「父中納言の姫君への愛情と、それと対照的な継母の虐待が描かれる場面。こうした設定は継子いじめ譚のパターンであり、後の物語の展開とよく照応している。ここにも描かれているように、父中納言は北の方に頭があらぬ。このことがさらに姫君を虐待させる結果になる。」と注を付ける。夫の発言に対して、かまわず蔑みを顕わにし、夫もそれに乗せられる。この様子は注目しておきたい。また『住吉物語』においても、姫君の父の中納言が入内させようと考えるが、北の方はそれを阻む。その場面が具体的に描かれることはないが、過去に帝からも入内させるようにと声がかかっていた中でそれを阻むことは

類似した状況が想像される。

次に、継子が幸せを手にした一方、自らが不幸な境遇にある継母の心情を見てゆく。

・この年ごろ、いみじき恥をのみ見せつるは、くやつするなりけりと思ふに、ねたういみじきこと二つなしとは、世の常なり一殿のうち、ゆすりみちてののしる。(三巻・二三四頁)

・北の方、「あなかしがまし。今は取り返すべきことにもあらず。な言ひそ。憎くおぼえしままにせしぞかし」と言ふに、かひなし。(三巻・三二六頁)

これは、中納言家に度々恥をかかせた衛門督の妻が、落窪の君だと知った時の北の方の心情だ。これ以前は衛門督を恨むも、受ける仕打ちに合点がゆかない様子であったが、その理由が判明し憤慨する。そうと分かれば衛門督への恨みではなく、ひたすら落窪の君への恨みであるが、これらの復讐は、衛門督が中心となつて行つたことであり、落窪の君はほとんど関与していない。むしろ中納言家の不幸を悲しんでいたのだ。そうとは知らないとしても、恨まれるのはやはり継子である。この後、中納言家は衛門督(のち、大納言・左大臣・太政大臣)の庇護を受けるが、それでも継子を恨み続け、越前守の説得によつて、ようやく鎮まることとなる。

『住吉物語』の継母の心情はこれとは異なつたもので、継子側の復讐に対して憎しみの感情を向けることなく、ひとえに自分の運命を嘆く。継子側の庇護は無く、実子も自分のもとを離れたのだが、その恨みを敵に向けることはない。

四―二 北の方の憎悪の対象

先行の「継子いじめ」を主題とした物語の考察をもとに、北の方に関する具体的な要素を比較してゆく。北の方の、判を押したように紫の上又は源氏を憎む様子は度々描かれるが、その場面の北の方の憎しみの対象を考察する。まず、そのような場面の最初の箇所である。

嫡腹の限りなくと思すは、はかばかしうもえあらぬに、ねたげなること多くて、継母の北の方は、安からず思すべし。物語に、ことさらに作り出たるやうなる御ありさまなり。

(賢木②一〇三頁)

これは北の方が、紫の上が源氏に引き取られていたと知った際の感情が書かれている箇所だ。自らの実子が不遇である中、継子が高貴な者の妻となっていることを妬ましく思っており、まさに従来 of (継子いじめ譚)と同様のものである。この箇所で見られる北の方の憎しみは、『落窪物語』や後世の類型にあるものと同様と考えて問題ない。

…北の方は心ゆかずものしとのみ思したり。女御の御まじらひのほどなどにも、大臣の御用意なきやうなるを、いよいよ恨めしと思ひしみたまへるなるべし。

(少女③七八頁)

次にこの箇所は、式部卿宮が自分の五十賀を源氏が盛大に催してくれることに喜んでいての対して、北の方は娘の入内に対する源氏の対応を根にもち、不満を抱いている場面だ。「北の方は心ゆかずものしとのみ思したり。」について、現代の注釈書は以下のよう

に注を付ける。

・紫の継母なり。仍かやうに式部卿の悦給ふも心にあはぬなり」(『全集』)

(『眠河入楚』)

・不満で、おもしろからぬことばかり思つていらつしやる。継母らしい感想である。

母らしい感想である。

(『新大系』)

・紫の上への、継母らしい感情。

(『新全集』)

・式部卿宮の北の方、紫の上の継母。継母らしい嫉妬した感情。

(『鑑賞と基礎知識』)

・「北の方は心ゆかずものしとのみ思したり」は、継母の北の方はその状況を気持が収まらず不愉快だとばかり思っていること。「ものし」は、婉曲的に対象への不愉快・嫌悪感を表す形容詞で、ここは北の方の源氏に対する不満が基底にある。

(『源氏物語注釈』)

『全集』は、『眠河入楚』にある、紫の上の継母故の感情であるという解釈を踏襲しており、以降の注釈書も『源氏物語注釈』を除いて「継母らしい」感情・感想であると考えている。

確かに、前掲の『落窪物語』にあるような、喜んでいる夫の感情に構わない、無遠慮な印象を受けるかもしれない。しかしこれらの注は誤りと考えられる。娘の入内に関することだと考えれば、あくまでも北の方から源氏に対する感情であり、そこに紫の上の介入はないはずだ。つまり、この箇所での憎しみの対象は源氏であり、紫の上とはほとんど切り離されている。『源氏物語注釈』にもあるように、既にあった不満に基づき、源氏に対して不満を抱く感情であ

ると考えるのが適切である。

母北の方泣き騒ぎたまひて、「太政大臣をめてなきよすがと思ひきこえたまへれど、いかばかりの昔の仇敵にかおはしけむとこそ思ほゆれ。女御をも、事にふれはしたなくもてなしたまひしかど、それは、御仲の恨みとけざりしほど、思ひ知れとにこそはありけめと思しのためひ、世の人も言いなしだに、なほさやはあるべき、人ひとりと思ひかしづきたまはんゆゑは、ほとりまでもにほふ例こそあれと心得ざりしを、ましてかく末に、すずろなる継子かしづきをして、おのれ古したまへるいとほしみに、実法なる人のゆるぎ所あるまじきをとて取り寄せもてかしづきたまふは、いかがつらからぬ」と言いつづけののしりたまへば、：(中略)：いよいよ腹立ちて、まがまがしきことなどを言ひ散らしたまふ。この大北の方ぞさがなものなりける。

(真木柱③三七五頁)

最後に、大君が髭黒と離縁して実家に帰ってきた際に、それも源氏のせいであるとして式部卿宮にあたる場面だ。北の方の感情に任せた物言いが印象的だが、この箇所となるもはや紫の上に対する感情が含まれていると読み取る余地はない。専ら源氏に対する強い憎悪である。最初は紫の上にも向けられていたかと思われた憎しみは、この頃になると全面的に源氏に向けられている。娘の離縁は確かに悲劇的な事態ではあるが、その怒りは髭黒に一切向けられず、それどころか、「実法なる人のゆるぎ所あるまじき」と評してかばっている。それほどまでに冷静な目を曇らせ、激しい怒りを源氏

に向けているのは、源氏に対する憎しみの蓄積によるものだろう。『新全集』は、この箇所のまとめとして、以下のように注を付ける。

これまで幾度か点描されてきた式部卿宮の北の方の不満が爆発する条。明らかに継子物語の一変型としての継母像といえよう。これは、北の方の様子を「継子物語の一変型としての継母像」と捉えている。「一変型」という表現の範疇にもよるが、もはや紫の上に対するものは見いだせず、源氏に対してひたすら恨み・憎しみを向ける様子は、『落窪物語』と『住吉物語』にはないものと言える。

これらをまとめると、北の方の主な憎しみの対象は紫の上ではなく源氏なのである。前掲の、従来の〈継子いじめ譚〉の例を見ると、継子の人間性に対して蔑み、いじめる様子が多々あったが、これらには認められない。また、『落窪物語』の継子の夫の行動に対しても徹底的に継子を恨むことや、『住吉物語』の、自分の運命を嘆くという心情と比較すると、不幸になった継母の感情に共通点は見いだせないが、やはり、激しく源氏を恨む様子は異様に感じられる。

〈継子いじめ譚〉の要素がないとは言いつつ切れないものの、類型的継母像と考えることへの疑問は強く残るだろう。

ここまでは通説に従い、憎しみの対象を「紫の上、又は源氏」と記述してきたが、紫の上の人格や行動に対して憎しみを抱くような場面は見当たらない。紫の上への憎しみを認めるのだとすれば、それは「源氏方の人間」であるという点か、幸福に対する妬みのほかには説明が困難である。

四―三 北の方の物笑いの対象

北の方の憎しみの対象を確認してきたが、次に北の方の物笑いの対象について、源氏や紫の上に関わるものに限定して考察する。

…継母の北の方などの、「にはかなりし幸ひのあわたたしき。

あなゆゆしや。思ふ人、かたがたにつけて別れたまふ人かな」

とのたまひけるを、さるたよりありて漏り聞きたまふにも、いみじう心憂ければ、これよりも絶えておとづれきこえたまはず。

(須磨② 一七二頁)

まずこの箇所は、源氏の須磨退去の際、紫の上に別れを告げる場面に挿入されているものだ。ここでの北の方の物笑いの種は、源氏と離れる紫の上の不幸であり、源氏に引き取られた(妻となつた)ことよって生じた不幸である。この感情の土台は、高貴なものに

引き取られ、妻となつたことへの妬みであることは言うまでもない。

式部卿宮の大北の方、常にうけはしげなることもをのたまひ出でつつ、あぢきなき大将の御事にてさへ、あやしく恨みそねみたまふなるを、かやうに聞きて、いかにいちじるく思ひあはせたまはむ、など、…

(若菜上④ 五三頁)

次にこの箇所は、女三の宮降嫁のことを源氏に聞かされた紫の上の心情を書いたものだ。実際の北の方の発言ではないが、「常にうけはしげなることもをのたまひ出でつつ」とあるように、恒常的に紫の上の不幸を願っている事が書かれる。紫の上はそのことを思い起こして思い悩むのである。

ちなみに、先の場面とこの場面は、紫の上にとって最も大きな試

練となつた二つの出来事だと言える。前者では実際に北の方の嫌味が耳に届き、後者では、北の方がこれを聞けばさぞ喜ぶであろうと推測する。紫の上を妬み、その不幸を願う北の方の感情は、紫の上自身の心に常に居座っていて、不幸に直面することで思い起こされる。

よつて、北の方は紫の上の不幸こそ悦びと考へていたと推測できる。

五 おわりに

ここで、四―二、三をあわせて考えると、源氏の兵部卿宮家(式部卿宮家)への負の感情や誤解(髭黒・玉鬘の一件)などが北の方の源氏への憎しみを膨らませ、その感情が派生して、源氏のもとで幸福に暮らす紫の上への妬みとその不幸を悦ぶ感情を増大させてゆくという構造が見えてくる。北の方の、紫の上と源氏への負の感情は、背後では継子・継母関係が影響しているが、単にその関係によるものであり、(継子いじめ譚)にある継母像と同様と捉えるべきではない。

さて、ここで三―四で提示した仮説を再検討したい。一般的な話として、人に何かを依頼され、悩みぬいた結果それを引き受けたが、その頃には事が片付いてしまっていて、拍子抜けするということがある。北の方は悩みぬいた末に若紫の引取りを決意したが、源氏のもとに引取られてしまっていた。その時には行方不明と聞き、拍子抜けしてしまい「口惜し(残念)」と感じるのである。その後、若

紫は源氏に引き取られ、妻となっていたと知る。源氏は夫としてこの上ない地位と器量の持ち主であろう。自らが引取り愛育し、幸せにしてやろうと考えていたが、その紫の上が源氏のもので幸せに暮らしており、その一方、実子は恵まれない境遇にある。この現実を突きつけられたとき、北の方は源氏へ憎しみを抱く。そして、この後は〈継子いじめ譚〉の継母と類似した人物となるのである。源氏には憎しみを、紫の上には嫉妬を抱き、源氏のもので不幸を感じている紫の上の姿ほど悦ばしいものはない。紫の上の不幸に関しては、自分に引取られていればそのような不幸を感じずに済んだのに、と嘲笑していたとも推測できる。

〈継子いじめ譚〉の継母と類似した人物と書いたが、それほど単純なものとは捉えてはならない。先に述べた挫折が心情の転換点であり、その後の北の画像を形成したと捉えることで、兵部卿官家(式部卿官家)と源氏の関係性も興行きのあるものとして見られる。

この結論を踏まえて、最後に考察したいことは「北の方の轍を踏まなかつた紫の上像」である。

紫の上もまた、北の方同様「継母」となったが、紫の上の継母としての生き方は、北の方とは全く異なるものであった。たしかに、紫の上と北の方には多くの相違点があり、特に、実子の有無と実母が存命か否かという点は、継子いじめの心理に大きく関わるものだろう。しかし、姫君を愛育し、中宮に仕立て上げるという最高の水準で役目を全うしたうえ、姫君の実母とも表面上良好な関係を保っていたことは、決して容易ではない。

紫の上がこのような継母になった要因の一つとして、北の方との関係性があると考えられる。つまり、自分が継母と良好な関係を築けず、継母の悪意を常々意識して生きてきたからこそ、継子を存分に愛して育て上げることができたのだ。これが正しいとすれば、北の方との関係性が紫の上の人格形成に影響を与えたことは間違いない。よって、北の方と紫の上の関係性を単なる〈継子いじめ譚〉の類型通りと捉えることは許されないのである。

注1 清水泰「継子物語の研究」『物語文学研究叢書 第二五巻 日本文学論考』クレス出版 一九九九年

2 注1に同じ。

3 三谷邦明『物語文学の方法Ⅱ』有精堂出版 一九八九年

4 関圭吾「婚姻譚としての住吉物語―物語文学と昔話―」『国語と国文学』至文堂 一九六二年十月

5 三谷邦明「平安朝における継母子物語の系譜―古『住吉』から『貝倉』まで―」『日本文学研究資料叢書 平安朝物語Ⅲ』有精堂出版 一九七八年

6 市古貞次『中世小説の研究』東京大学出版会 一九五五年

7 注4に同じ。

8 「ジャパン・ナレッジ」(<http://japanknowledge.com/>)

9 毛利正守「源氏物語における『昔物語』と『物語』について」『皇学館大学紀要』一九七一年一月

10 北村季吟著・有川武彦校訂『源氏物語湖月抄(上) 増注』講談社 一九八二年

11 萩原広道『源氏物語評釈』國學院大學出版部 一九〇九年

12 吉澤義則『對校源氏物語新釋 卷の一』平凡社 一九三七年

13 池田亀鑑校註『日本古典全書「源氏物語」』朝日新聞社 一九四六年

- 14 山岸徳平校注『日本古典文学大系 源氏物語二』岩波書店 一九五八年
15 畑恵里子「継子物語と紫の上——落窪の女君との重層性——」『中古文学』笠間書院 二〇〇七年六月
16 注8に同じ。
17 注8に同じ。
18 長谷川福平「源氏物語に於ける落窪物語の重なる影響」『国文学雑誌』國學院 一九〇一年六月
19 石川徹『平安時代物語文学論』笠間書院 一九七九年

*本文の引用は、『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠った。

*注釈書に関して、「現代の注釈書」と書いた際、以下の七つの注釈書を指し、引用元を示す際はそれぞれ略称を用いた。

- 『玉上評釈』 〓 『源氏物語評釈』（角川書店）
『全集』 〓 『日本古典文学全集』（小学館）
『集成』 〓 『新潮日本古典集成』（新潮社）
『新大系』 〓 『新日本古典文学大系』（岩波書店）
『新全集』 〓 『新編日本古典文学全集』（小学館）
『鑑賞と基礎知識』 〓 『源氏物語の鑑賞と基礎知識』（至文堂）
『源氏物語注釈』 〓 『源氏物語注釈』（風間書房）

（あんどう・じゅん 平成二十七年学学部卒業生）